



Title	渡し守キイの伝説について (20周年記念号)
Author(s)	福岡, 星児
Citation	スラヴ研究, 20, 1-9
Issue Date	1975
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5046
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113008.pdf



[Instructions for use](#)

渡し守キイの伝説について

福 岡 星 児

12世紀のはじめに完成された現存するロシア最古の年代記「過ぎし歳月の物語」のほとんど冒頭にキイの伝説が出てくる。キイはいわゆる名祖^{エボム}であって、この伝説は古代ロシア国家の首府となったキエフの名称の由来を説明するものである。ドニエプル河中流域に住んでいたスラヴ人はポリャーネ族であったが、キイ、シチュク（あるいはシチョク）、ホリーフという3人の兄弟とその妹リュベジがやってきて、ドニエプル河の右岸に連なる丘の上に住むようになった。キイが住んだのはいまポリチェフの坂のある丘（キエフの中心部）であり、シチュクが住んだ丘はいまのシチュコヴィーツァ、ホリーフが住んでいた丘がいまのホリヴィーツァである。やがて彼等は町を建設し、長兄の名にちなんでキエフ、つまりキイの町と名づけたのである。キエフを流れてドニエプル河に注ぐリュベジという川の名が妹の名前に由来するというのであろうが、そのことは現在のテキストにはない。

以上が取り立てて物語的な筋を持ってはいないこの伝説の中心的な部分であるが、しかしそのすべてではない。キイに関連して当時のポリャーネ族について多少の描写があり（ポリャーネ族について語られているより大きなコンテキストの中にキイの伝説が出てくるとも言える）、さらにキイという人物が何者であったかについて、やはり伝説がつけ加えられている。

ポリャーネ族について言われているのは、先ず彼等がキイの兄弟たちより以前にもいたこと、それぞれの氏族に分かれて、それぞれの場所に住んでいたということである。キエフの町の建設されたあとの彼等については、町の周辺に大きな森が広がっており、そこで人びとは狩猟をしていたこと、賢明な人びとであったということが述べられている。そして彼等はポリャーネと呼ばれていたと重ねて述べ、その後裔がキエフの地に住み、いまに及んでいるのであると結んでいる。

キイとポリャーネ族との関係ははっきりしないが、外来者であるらしい叙述の仕方である。支配、被支配の関係についても定かではないが、キエフの町を建設したということからすれば支配者であったと考えられる。

外から来た人間とされていることについてリハチョーフは、この伝説がきわめて古いタイプに属するものであり、新しい社会的現象を歴史的な発展の結果としてとらえず、すべて外的な原因や神の意思に帰して説明しようとする未発達な思考を反映しているからであると述べている¹⁾。キイ、シチュク、ホリーフというのは本来おそらくポリャーネ族の中の各支族においてそれぞれの先祖とされた人物たちであり、宗教的な意味を持った祖先崇拜の対象だったのであるが、ポリャーネ族が統合されて行く過程で、またその結果として兄弟ということにされたのだというのである。

1) Д. С. Лихачев—Русское народное поэтическое творчество, Том 1, М.-Л., 1953, стр. 155-7.

ポリャーネ族がそれぞれの氏族に分かれて暮らしていたと言うのであるらしい箇所は、年代記の原文がごたごたとして意味のとり難いものになっている。仮に氏族と訳した *родъ* という語はここで連続的に出てくるのだが、それをクロスの英訳では *families, gens, kinsfolk* とそれぞれ訳し変えている²⁾。リハチョーフは「過ぎし歳月の物語」の注解の中で、この場合の *родъ* とはおそらく支配者の一族、つまり *династия* を意味することばだと述べている³⁾。このような解釈にはコマローヴィッチ等の見解の影響があると思われるのであるが⁴⁾、この解釈に従えばここはポリャーネ族はそれぞれの王族によって治められ、暮らしていたというようになる。

この伝説が記された時点ではしかしすでに祖先崇拜という宗教的な意味合いは失われており、伝説はキエフとその地名の由来を説明するものになってしまっていた。そして宗教的な意味を離れてその歴史的な内容が問題とされるようになっており、キイが何者であったかについても幾通りかの説が出ているといった工合で、それが最後につけ加えられているキイその人についての伝説であるとリハチョーフは説明している。

「真実を知らぬ人びとはキイが渡し守であったなどと言う、当時キエフにはドニェプルの対岸からの渡し場があり、それ故「あのキイの渡しへ」というように言われたというのである⁵⁾。しかしもしキイが渡し守であったならばツァーリグラードへ行ったりはしなかったはずである。キイはおのれの一族を支配していたのであり、皇帝のもとへ赴いて、大いなる名誉を当時のその皇帝から受けたと言われる。彼は帰途について、ドナウ河に至ったが、そこである場所が気に入り小さな町をつくった。彼は一族とともにそこに居を定めようとしたのであったが、あたりに住む人びとは彼にそれを許さなかった。しかしそのことがあっていまもドナウ河のあたりの人びとはこの町をキエヴェツと呼んでいるのである。キイはおのれの町キエフに帰りつき、そこで一生を終った。彼の兄弟であるシチェクとホリーフも、また彼等の妹ルイベジもそこで歿した⁶⁾」

キイは渡し守などではなかったとかなり激しく否定されているところを見ると、この伝説の論議は重要な意味を持っていたように思われる。

キイの伝説は年代記の中でどのような位置を占めているであろうか。単にキエフの町の名の由来を説明するためのものであるならばエピソードに過ぎないと言ってよい。キエフの起源について触れているにしてもそれはわれわれに何ほどのことも明らかにしてくれるものではない。おそらく「真実を知らぬ人びとは」にはじまる後段がなかったら、この伝説はキエフのことからはじめてロシアの歴史の筆を起こそうとした年代記者が巻頭において半ば装飾的な導入部、あるいは一種のエピグラフと見なすことさえできよう。

2) The Russian Primary Chronicle, Laurentian Text, translated and edited by S. H. Cross and O. P. Sherbowitz-Wetzor, Cambridge, Mass., 1953, p. 54-5.

3) Повесть временных лет, II, Изд-ство АН СССР, М.-Л., 1950, стр. 219, 221.

4) В. Л. Комарович—遺稿 «Культ рода и земли в княжеской среде XI-XIII вв.» が ТО-ДРЛ, XVI, 1960 に収められている。

5) 人びとがその渡し場を指して「キイの」と呼んだところから、渡し場のあるその町も「キイの町」—キエフと呼ばれるようになったという説のことである。

6) Повесть временных лет, I, М.-Л., 1950 による。

渡し守キイの伝説について

事実年代記のものとテキストにあった序文（「ノヴゴロド第一年代記」によって伝えられている）では、先ずキイとキエフのことがロムルスとローマ、アレクサンダーとアレクサンドリア等々のひそみにならって荘重に語り出されている。だが序文の筆者はそのあとにつづけて、

「彼（キイ）はまた渡し守であったとも言われ、また他の者は（彼が）町の周辺で狩猟をこととしていたとも言う」⁷⁾

と述べている。この序文は「過ぎし歳月の物語」の前身である「原初年代記」（1095年頃）の序文であったとされるが、ネストルによって編さんされた「過ぎし歳月の物語」（1113年頃）の本来のテキストの序文であったとする研究者もある⁸⁾。現在の「過ぎし歳月の物語」はネストルのあと間もなく校訂された（1116～8年）ものであることはよく知られているが、ここでは序文は姿を消している。一方序文を伝えている「ノヴゴロド第一年代記」では本文におけるキイ伝説に「真実を知らぬ人びとは」以下の後段は欠けているのである。

それで当然考えられるのは、この後段は序文に対置して書かれたのであろうということである。そして後段をつけ加えた者が序文を削除したのである。なぜなら序文の筆者は私見をさし控えたかたちで、かの公（キイ）はまた渡し守であったとも言われ云々、と述べているのに対して、後段の筆者はそれを反駁するかたちで自分の主張を前面に出しており、互いに食い違った記述がさほど間を置かず並ぶことを当然避けたであろうからである（序文の削除された理由がもっぱらキイについての見解の相違にあったかどうかはまた別問題であるが）。しかしまた「真実を知らぬ人びと」のあいだにキイについてさまざまな説があったことが序文とともに脱落してしまったので、現在の「過ぎし歳月の物語」ではキイが渡し守などではなかったという強い主張が唐突に響くことになったのではないかと考えられる。

とすれば後段の筆者が「知らぬ人びと」と呼んだ中には序文の筆者も含まれていたのあったろう。しかしここでもうひとつ考えられるのは序文の筆者が、後段の筆者のような主張もあることを知っていて書かなかった場合である。古くからさまざまな議論があり、しかもその中にキイがツァーリグレード（コンスタンチノーブル）へ行き（遠征？）、時のビザンチン皇帝から名誉をもって遇せられたという説もあったとすれば、これこそ書きとどめるにふさわしい事件ではないだろうか。何等かの理由で、例えばそのようなことは信じられないとか、それは別人に関することでキイではないとか、あるいはさらにその他の理由で序文の筆者が故意に触れなかったという場合もあり得るということである。後段の筆者の方が「知らぬ人びと」という場合もないとは言い切れないのである。

もともと私はキイの伝説をあまり重要なものと考えていたわけではなく、特に興味があったわけでもない。「過ぎし歳月の物語」で感じられるあの唐突さと、渡し守ということの何か場違いな奇妙さだけが気に掛かっていたのである。本来の伝説自体はむしろ変哲もない。キエフの名称の由来ならば、これは作り話でキイという人名こそが地名のあとから

7) Новгородская Первая Летопись, Изд-ство АН СССР, М.-Л., 1950 による。

8) М. Х. Алешковский, Повесть временных лет, Москва, 1971.

考え出されたフィクションかもしれない⁹⁾。いや、そう取り立てて疑ってみるにも当らないこれは古いタイプの伝説のひとつと受け取れる。

キイと呼ばれている人物、この名前で記憶されるようになったそれこそ伝説的な人物ならばもちろんいたかもしれない。年代記者の創作とは考えられないから、少くともその原型は実在したのであろう。伝説の背後にあったらしい何等かの事実は取り止めもなく模糊としているのだが、渡し守だったとも、狩猟をしていたとも言われてきたのは、実在の人物にまつわることであったのだろう。公としがない渡し守というのは何とも奇異な取り合わせである。だがそれにも拘わらずここからは真実の匂いが漂ってくる。

後段の筆者はキイが渡し守などではなく、れっきとした公だったと主張しているわけだが、その公がツァーリグレードへ赴いたと言うことの方がにわかには信じ難い。渡し守のイメージは強くキイにつきまとして離れないので、その彼がツァーリグレード遠征を行なった（「ニコン年代記」には с силою ратью とある）ということの方がうさん臭く感じられてくる。皮肉なことに後段の筆者が激しく反論すればするほど却ってそうだとってもよい。

キイ伝説に本来の古い層とあとからつけ加えられた部分とから成る複合性を指摘することはそう見当違いではないであろう。しかもそれはこれまで見てきたような単純な複合性ではないかもしれないのであるが、ともかく後段ではキイのことだけが述べられており、シチュク、ホリーフについてはほとんど無視されている。後段の筆者は比較的新しい伝説、彼が真実であると信じていた伝説を古い伝説に重ね合わせたのではないであろうか。もともとの伝説は後段の筆者にとってもすでにきわめて古い伝説となっていたであろう。この伝説は今日のわれわれにとってはもはや全くと言ってよいほどそれを解く手掛りもないものであるが、しかし後段の筆者にとってはまだ重要な意味を持っていた。訂正を加えなければならないと考えるほどに信じてもいたし、同時にまた訂正を加え得ると考えるほどに伝説は風化していたということでもあろうか。

古い伝説でキイの身分につきまとして言われてきたことを後段の筆者は本当の意味での論証によってではなく、一方的に否定している。それは二者択一のかたちでさえもなく、全くの押しつけであり、信じ切って疑わない態度である。後段の筆者にこのように断定させる根拠となったより新しい伝説とその信憑性があらためて問題になるのがあがあるが、ツァーリグレード遠征云々のことはそれはそれでまた史実につながっているのではないだろうか。先の言い方をすれば、ここからもやはり真実の匂いはするのである。

おそらく別々の人物についての異った伝説、時間的にもかなり距った二つの伝説が、11世紀から12世紀初頭前後の年代記者か校訂者によって混同され、ひとつの伝説になってしまったのではないかと、というのが私の言わば文学的な推論である。

このような推論の当否は歴史的な事実の裏づけを俟たなければならないが、歴史家もき

9) キエフという地名は他にも東欧のスラヴ圏に同様の地名があるだけでなく、キエフをめぐってのポドール、シチェコヴィーツァ等の地名が、そっくりそのままポドリ、ステジェヴィツェとブラハにも見られるということである（В. П. Кобычев, В поисках прародины славян, Москва, 1973, стр. 99）。キイが建設したというドナウ河にのぞむキエヴェツについては、現在そのような地名はなく、歴史的にも不明である。

渡し守キイの伝説について

わめて資料に乏しいこの時期（6世紀から9世紀前半までのことである）、この地域のことになると手探りといった状態であるようだ。特に7世紀末クバニ河流域からボルガールの主力がドナウ河へ移動して以後、9世紀のはじめ、830年代に、ハザール汗国がビザンチンの協力を得てドン河にのぞむサルケル要塞を建設するまで、約1世紀半以上の間の黒海北岸のステップ地帯の状況は全く不明である。アヴァールとハザールという二つの国家の勢力圏の中間に位置する無人地帯になっていたとも考えられる。だがその北方のレソ・ステップ地帯にはさまざまな遊牧民や農耕民がいた。キエフはレソ・ステップ地帯の南端に位置する東西通商路の要衝であった。

先の二つの国家がともに商業に大きな関心を持っていたことはよく知られている。ボバによれば¹⁰⁾、キエフはドニェプル河の渡河点を制するアヴァールの前哨基地で守備隊がいたであろうという。おそらくアルタイ系であるキイの一族はアヴァールの同盟に属し、キエフを掌握していたが、周囲のスラヴ人とは支配というよりは一種の協調関係にあったのだというのである。伝説においてキイが公であったとされながら、ポリャーネ族との関係が互いに独立したそれであるようにも読みとれることも、この指摘が正しいとすれば説明がつくわけである。

キイが、と言うよりはキイの像に重ね合わされた人物であろうが、コンスタンチノーブルの攻撃に向かったということについてはどうか？ 後段の筆者はそれがいつ頃のことなのかも明らかにしていないし、この事件を歴史的に確定することは先ずとうてい不可能であろう。しかしこの年代記者あるいは校訂者には何等かの根拠があったに違いない。誰がということのを別にすれば、一般的に言ってそのような行動の可能性はあり過ぎるくらいにあった。周知のように黒海北岸の地を発進してロスあるいはルスと呼ばれる人びとの集団がビザンチンの諸都市に、やがてコンスタンチノーブルに姿を現わしはじめたのは9世紀前半である。伝説がこの段階の史実を反映しているということは充分考えられるし、歴史家の見方もおおむねそのようなものである¹¹⁾。

以上キイの伝説の二つの部分から成る複合性について考えてみたのであるが、年代記全体のコンテクストからすれば、この伝説の叙述には少くとももうひとつあとからつけ加えられたと見られる色調というか観点がある。それはポリャーネ族がすでにキリスト教徒であったかのように描かれている点である。キリスト教徒という言葉は使われていないが、伝説の中でポリャーネ族が賢明な人びと（мудри и смыслени）であったとあり、それがキリスト教徒としての徳性と英知を指すものであることは、これらの言葉の「過ぎし歳月の物語」のみならず、キエフ時代の他の用例に照らして明らかである。（この伝説の中だけで考えてみても、そうでない限り他にこれと言った理由もなしに形容詞を重ねて「賢明な」という意味のことを強調しているのは奇妙に感じられる。）

年代記のコンテクストというのは、例えばキイの伝説のあと東スラヴの諸部族の風習を述べているくだりでは、神の掟を知らぬ野蛮な異教徒（поганин）であった他の諸族に昔か

10) Imre Boba, *Nomads, Northmen and Slavs, Eastern Europe in the Ninth century*, The Hague—Wiesbaden, 1967, pp. 43-55.

11) 例えば М. В. Левченко, *Очерки по истории русско-византийских отношений*, Москва, 1956, стр. 56.

ら「温和で」物静かなポリャーネ族の生活が対置され、ついでハザールに貢納を強いられたポリャーネ族が両刃の剣を差し出すエピソードでは、かつてモーゼに率いられた民を選んだと同じ神の意思が彼等の上に働いていたことが語られるのである。これらは「過ぎし歳月の物語」の編者の視点につながるものであり、ナソーノフはそれをキエフ-ポリャーネ中心思想 (киево-полянский патриотизм) の表われであるとしている¹²⁾。

ナソーノフによれば、先行する「原初年代記」はまさにキイの伝説から叙述を起こしていたのである。これに対して「過ぎし歳月の物語」の作者はすでにスラヴ民族の総体についての認識を背景に持ちながら、国家と国民（もちろん中世的な意味における）を意味するルーシの歴史を新たに、より広汎に捉えなおそうとしており、もはやキイ伝説を起点とする狭隘な枠の中に満足することはできなかった。「原初年代記」のキイの伝説がキイ等の兄弟を外来者としながらも、キエフの由来のみならず、ポリャーネ族のはじまりをキイに結びつけているかの如くであったのに対して、「過ぎし歳月の物語」の作者は「これらの兄弟の以前にもポリャーネ族はいた」と述べて、ポリャーネ族の歴史がより古くにさかのぼることを示したのである。（「これらの兄弟以前に」という表現が、実際にキイ、シチェク、ホリーフのことが述べられる前に出てきてしまっているのは、この伝説のテキストのもうひとつの問題点であるが、ナソーノフはそのことの説明にも触れているわけである。）

そして、ナソーノフによれば、それにも拘わらずキエフ-ポリャーネ中心思想が作者の中にあつた。キエフ国家の遠心的な拡大、発展の一方には、キエフを中心とする政治的な思考がそれを支えるものとして必然的であつたというのである。したがってポリャーネ族がすでにキリスト教徒的であつたとする「過ぎし歳月の物語」の編者の視点は、先行する年代記の中に彼が見出したキイ伝説のテキストの内容と矛盾するものであつた。

「ノヴゴロド第一年代記」のキイ伝説にはポリャーネ族は他の諸種族と同様に異教徒であり、湖や泉や木立ちを祀っていたとあり、例の序文にもキイの時代に彼等は異教徒であり、キエフの「丘で悪魔に供え物をしていた」とされているのである。この序文をナソーノフも「原初年代記」に付されたものと考えているのであるが、しかしポリャーネ族の異教的風習に関する記述は「原初年代記」の編者もさらに先行する古い年代記から受けつくだものと見做している。現在の「過ぎし歳月の物語」ではこの序文は前述のように姿を消しており、また「ノヴゴロド第一年代記」本文によって伝えられているキイ伝説のテキストにある異教徒ポリャーネ族の記述も見られない。

それではキイの伝説においてポリャーネ族がすでにキリスト教徒的であり、またかつて異教徒的であつたことさえないかのように描かれるようになったのはもっぱら「過ぎし歳月の物語」の作者の所為だったと言えるだろうか。この点で「過ぎし歳月の物語」の作者ネストルのした仕事の輪廓はかなりはっきりしているし、確かに多くのことが彼の所為だったのである。ただ問題なのはネストルが宗教人として、歴史家としてどれほど正確な史実を踏まえて書いたのか、またそれを伝えているのか、ということである。

例えば、使徒パウロはスラヴ人の使徒であり、したがって「パウロはわれらルーシの師である」、ルーシと呼ばれるようになったがポリャーネはスラヴ人であるから、という主

12) А. Н. Насонов, История русского летописания XI—начала XVIII века, Москва, 1969, стр. 76.

渡し守キイの伝説について

張はネストルの筆になるものである（この記述は現在の「過ぎし歳月の物語」では898年に置かれているが、もともとはキイ伝説の直前に位置していたと推定されている¹³⁾）。しかし年代記のより古い層に属すると考えられる部分（キリスト教徒ヴァリャーグ人たちの殉教の物語）には、使徒も予言者もかつてロシアを訪れたことはないが、ルーシの人びとは神の意志によってキリスト教を選んだという考え方がされている。

ネストルの主張には一定の歴史的、政治的な、また宗教的な視点があったことについては先にも触れたが、しかしキイ伝説におけるキリスト教徒ポリャーネ族の描写をすべてネストルの視点に帰して説明してしまうわけにはいかない。ウラジーミルによってキリスト教が古代ロシア国家の国教となる以前にも、ルーシと呼ばれた人びとの幾度かの改宗があったことは確かであるが、ネストルはそれらの歴史的事実については、オリガの受洗を例外として、聖ウラジーミルに至るまでは何ひとつ具体的には伝えていないし、パウロ伝説とつづくキイ伝説に暗示されている改宗者ポリャーネ＝ルーシについても、当然かなり早い時期のことになるわけだが、きわめて曖昧模糊としている。

キイの伝説に問題を限っていまひとつ付け加えるならば、実はネストルの仕事と見られるものがそれほど単純に明らかであるわけではない。年代記の編者はキイ伝説を同一人物をめぐるひとつのものとしていたのであり、後段に属すること（キイのツァーリグラード遠征）を前段に関係づけて伝説そのものを変改しようとしたように、同じく後段の時代に属すること（ポリャーネ＝ルーシの改宗）を前段そのものの中に持ち込み、それと矛盾する記述（異教的風習）を前段から削除し得たはずである。ただその痕跡や経過を辿ることは今日からはもはや往々不可能である。「ノヴゴロード第一年代記」の異教徒ポリャーネ族の記述は文章の性格から言って明らかにかなりあとからつけ加えられたもの（したがってネストルは削除するまでもなかった？）と思われる反面、キリスト教徒的な属性を強調している例の形容詞はすでにここで、異教徒の記述と矛盾したまま、使われている。また同じポリャーネ族の異教的祭祀の描写でありながら本文の「湖や泉や云々」と序文の「丘で悪魔に云々」とは、その内容から言ってもそれぞれ別人の手によって記されたものと考えざるを得ない。

さて、それはともかく、後段の筆者の主張するキイがツァーリグラードへ行ったということが歴史的にあり得ることであったのと同様に、ポリャーネ族のかなり早い時期におけるキリスト教への改宗ということもまたあり得ることなのである。ただしかなり早い時期というのはキイがツァーリグラードへ行った後段の時期に相当する程度の早い時期ということで、もちろん伝説の最も古い層に関係づけて考えることはできない。キイ伝説の新しい層に属する部分にはツァーリグラードへ行ったということについても、またキリスト教徒であったということについても、それぞれ何等かの根拠があったのではないかと思われる。

史料的に確実なルーシによる最初のコンスタンチノーブル攻撃は860年であり、このときのルーシ（ロシアの年代記にはアスコリドとディールの名が出てくる）はキリスト教に改宗している。しかしそれ以前にも同様のことがあったらしいことは断片的に知られてお

13) 現在は使徒パウロの記事をここから898年に移した校訂者によって、キイ伝説の前には使徒アンデレの伝説が挿入されている。(M. X. Алешковский, Повесть временных лет, стр.46, 116)

り、あるいは推測されている。キイが当時の皇帝から「大いなる名誉を受けた」というのは、ビザンチンとスラヴの関係史から見て、改宗と何等かの取り決めを意味していると考えるのが妥当であろう。エリクソンは「皇帝のもとへ赴いて…… 当時のその皇帝から」という表現には皇帝の名前を故意に伏せている形跡が感じられるとして、その理由はその皇帝が最後の、最大の偶像破壊期の皇帝テオフィルス（842年没）だったからではないかと述べている¹⁴⁾。

偶像破壊期を扱った文献はビザンチンの歴史書そのものも修道院関係者の手によって不可思議な奇蹟や奇怪な出来事にみちたもの書き変えられており、一方ロシアには当然まだ史料と呼べるものがない。こうした事情のためにこの時期のロシアとビザンチンの関係については具体的なことはほとんど何も分からない。ロシアで記録ということが行なわれるようになり、やがて年代記が編さんされるようになってから、それらの中では9世紀前半以前のことにしても古い資料を使って（たいてはビザンチンの年代記類であるにしても）触れられている。もちろん古い部分になればなるほど半ば伝説的な記述であるが、しかしそれらのことについて今日考えられるほどロシア人自身が無知だったわけでも、手掛りがなかったわけでもないであろう。そしてビザンチンにおいてだけでなく、ロシア側でも何等かの形で伝えられていた史実（例えば偶像破壊期におけるルーシの改宗に関するそれ）が変改され、あるいは故意に伝説化された可能性さえ考えられるのである。キエフ・ロシアの年代記者たちのもとにはわれわれの知らない伝承をはじめ、さまざまな形の「資料」があったであろうことは疑うわけにはいかない。

最後にキイの伝説は「過ぎし歳月の物語」その他の年代記ではまだ年代日付けのない部分に置かれているが、「ノヴゴロド第一年代記」では AM 6362 という年代が付されており、同時にそれはこの年代記の最初の日付けで「ルーシの地のはじまり」の年になっている¹⁵⁾。「過ぎし歳月の物語」におけるルーシのはじまりは AM 6360 とされ、これは西暦852年ということになるが、年代記者は何をもってロシアの歴史のはじまりと見做していたのか、それとキイの伝説が関係づけられたり、関係づけられていなかったりするのは何故か等、問題はまだまだ残っているが、予定していた枚数を超えたので、これらについてはやはりエリクソンが興味深い事実を挙げていることを指摘するにとどめておきたい。

14) K. Ericsson, The Earliest Conversion of Rus' to Christianity, The Slavonic and East European Review, Vol. XLIV, No. 102, London, 1966, pp. 98-121.

15) ルイバコーフは「ノヴゴロド第一年代記」におけるキイ伝説のこのような日付けをまったくフィクション的なものとしている。(B. A. Рыбаков, Древняя Русь. Сказания-Былины-Летописи, Москва, 1963, стр. 25)

О летописном предании о Кие-перевозчике

Сэйдзи Фукуока

Принимая во внимание текстологические выводы М. Х. Алешковского и снова перечитывая текст летописного предания о Кие, мы заключаем, что данное предание состоит по крайней мере из двух одновременных пластов.

Почему автор древнейшей летописи, добросовестно излагая версию о том, что Кий был перевозчиком или занимался охотой около города, ничего не упомянул о его походе на Царьград, несмотря на всю важность такого происшествия? С другой стороны редактор «Повести временных лет», вставивший версию о походе, не мог восстановить имени императора, который воздал Кию великие почести. Это указывает, что русским героем, совершившим дальний поход, не был Кий, а другой неизвестный по имени вождь.

Мы согласны с К. Эрикссоном в предположении, что поход Руси и последовавшее обращение в христианство имело место в период последней стадии иконоборчества (до 842 г.). Впоследствии церковники принуждены были умолкнуть об этом событии. Имя героя со временем основательно вышло из памяти народа.

Потом, после того, как прошел еще большой промежуток времени, поход, ставший теперь тоже полуполюгендарным, был связан с именем героя древнейшего предания, основателя Киева. Однако автор «Предисловия», сохранившегося в составе «Новгородской первой летописи», был еще далек до утверждения этой новой версии (возможно, даже умышленно распространенной).